

バーニーズ・マウンテン・ドッグ における悪性組織球症の二症 例

梅島動物病院
牛草貴博

悪性組織球症

- 単球由来の腫瘍性疾患
- 肺や肺門リンパ節をよく侵し、大小の結節を形成する。脾臓、肝臓、骨髄、皮膚などにも腫瘍浸潤がみられる
- 呼吸器系症状および神経系症状がよく認められる。貧血、低アルブミン血症が顕著
- バーニーズ・マウンテン・ドッグで多く、雄に多発する。多因子性の遺伝要因が疑われる

症例1

- バーニーズマウンテンドッグ(37.7kg)、雄、6歳3ヶ月
- 数ヶ月前より跛行が認められ、他院にて治療するも改善が認められないとのことで当院に転院。
- 当院初診時、左後肢の跛行および浮腫が認められた。X-rayでは異常なし。アルブミンの低下を認めた。
- 第14病日に背中に径2~3cmの腫瘤、左鼠径および左膝下リンパ節腫大が認められた。針生検の結果、悪性組織球症と診断された

CBC、電解質 症例1

- WBC 170 $10^2/\mu\text{L}$
- RBC 685 $10^4/\mu\text{L}$
- HGB 17.5 g/dL
- HCT 53.0 %
- MCV 77.4 fL
- MCH 25.5 pg
- MCHC 33.0 g/dL
- PLT 31.3 $10^4/\mu\text{L}$
- Na 149 mmol/L
- K 5.5 mmol/L
- Cl 116 mmol/L

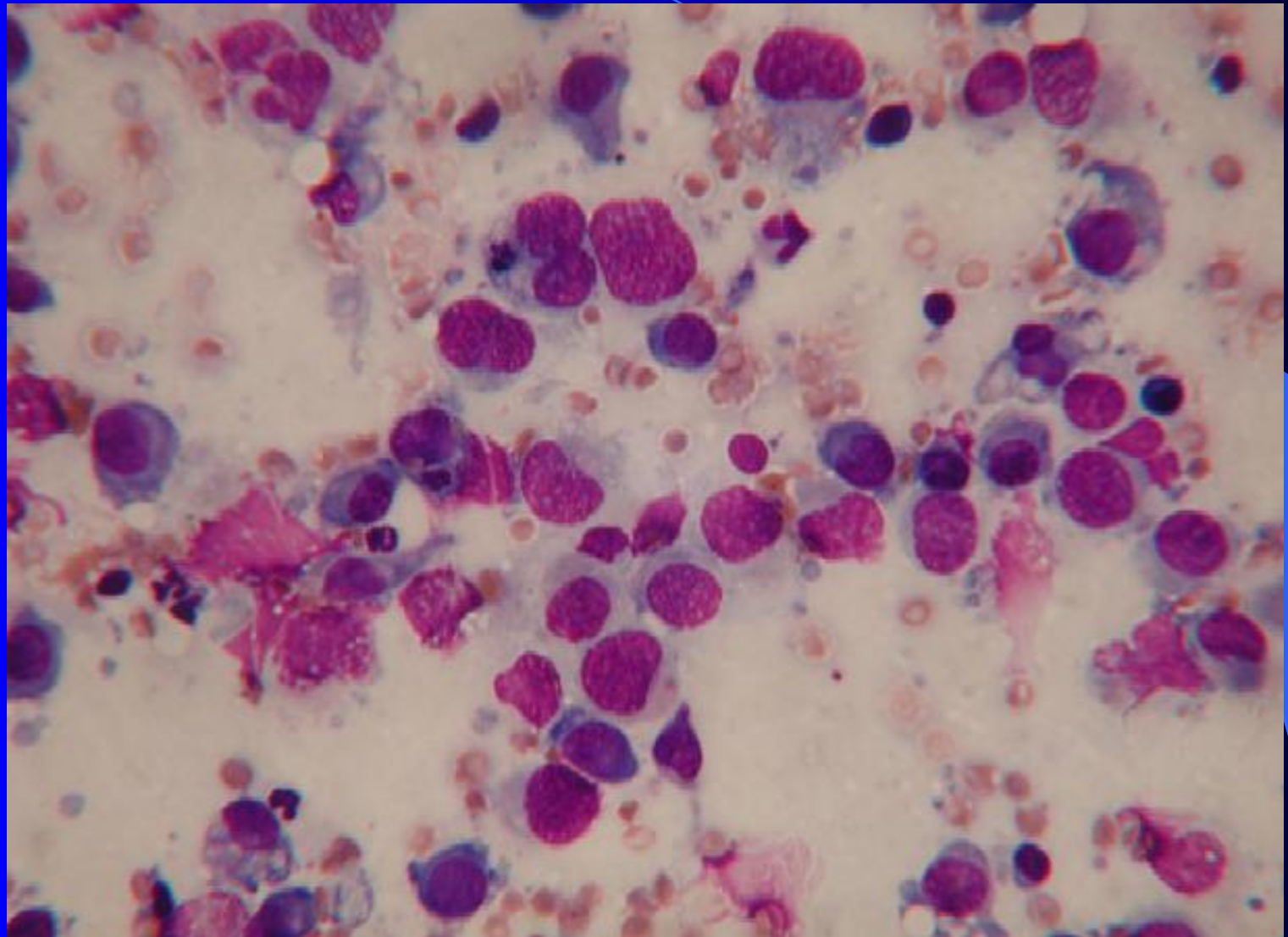


血液生化学検査 症例1

- ALB 1.87 g/dl
- ALKP 60 U/l
- ALT 17 U/l
- AMYL 2265 U/L
- BUN 19.4 mg/dl
- CREA 1.67 mg/dl
- GLU 113.3 mg/dl
- CHOL 154.0 mg/dl
- Ca 8.29 mg/dl
- NH3 25 umol/l
- TP 4.83 g/dl
- GLOB 2.96 g/dl

膝関節のX-RAY 症例1

皮膚腫瘍のFNA写真 症例 1



経過 症例1

- 第14病日よりプレドニゾロンの投与を開始し、COP療法に基づき第20病日と第27病日にビンクリスチンを投与したものの効果は認められず背中の腫瘍及びリンパ節はさらに腫大していった。
- 第33病日には食欲廃絶および貧血がみられたため、対症的な輸液療法を続けたが、第37病日に斃死。飼主の希望により、剖検は行えなかった。

症例2

- バーニーズマウンテンドッグ (17.25kg)、雄、7歳11ヶ月
- 7ヶ月前に他院にて皮膚腫瘍の摘出手術を行っていた(病理検査は行われなかった)
- 2ヶ月前より咳嗽、下痢がみられ、次第に消瘦していった。
- 当院初診時に血液検査、胸腹部X-rayおよび針生検を行った

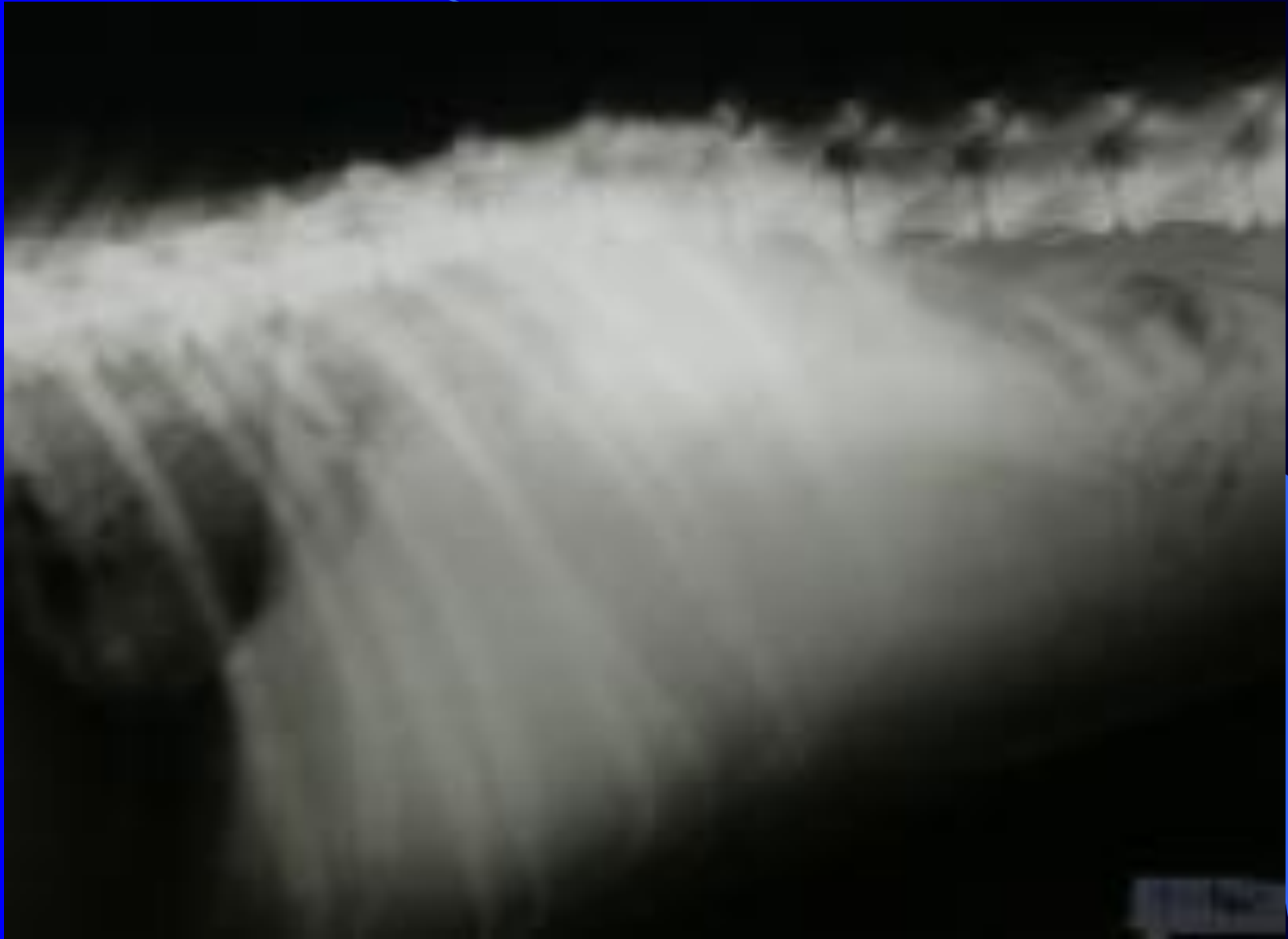
CBC、電解質 症例2

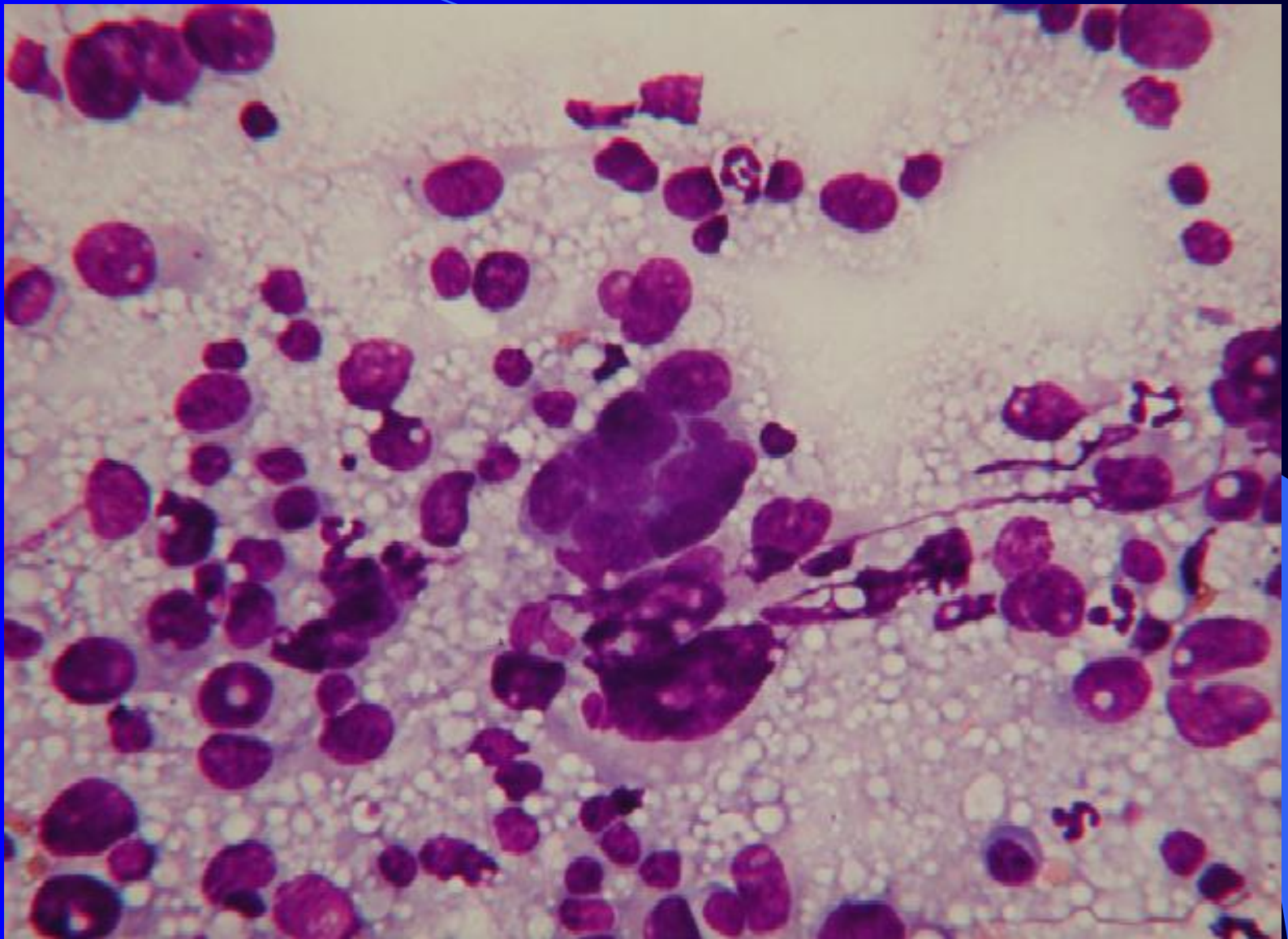
- WBC 211 $10^2/\mu\text{L}$
- RBC 314 $10^4/\mu\text{L}$
- HGB 7.8 g/dL
- HCT 24.1 %
- MCV 76.8 fL
- MCH 24.8 pg
- MCHC 32.4 g/dL
- PLT 8.7 $10^4/\mu\text{L}$
- Na 146 mmol/L
- K 4.7 mmol/L
- Cl 120 mmol/L

血液生化学検査 症例2

- ALB 2.08 g/dl
- ALKP 102 U/l
- ALT 69 U/l
- AMYL 788 U/L
- BUN 25.4 mg/dl
- CREA 0.89 mg/dl
- GLU 71.2 mg/dl
- CHOL 157.8 mg/dl
- Ca 8.72 mg/dl
- NH3 17 umol/l
- TP 6.15 g/dl
- GLOB 4.08 g/dl

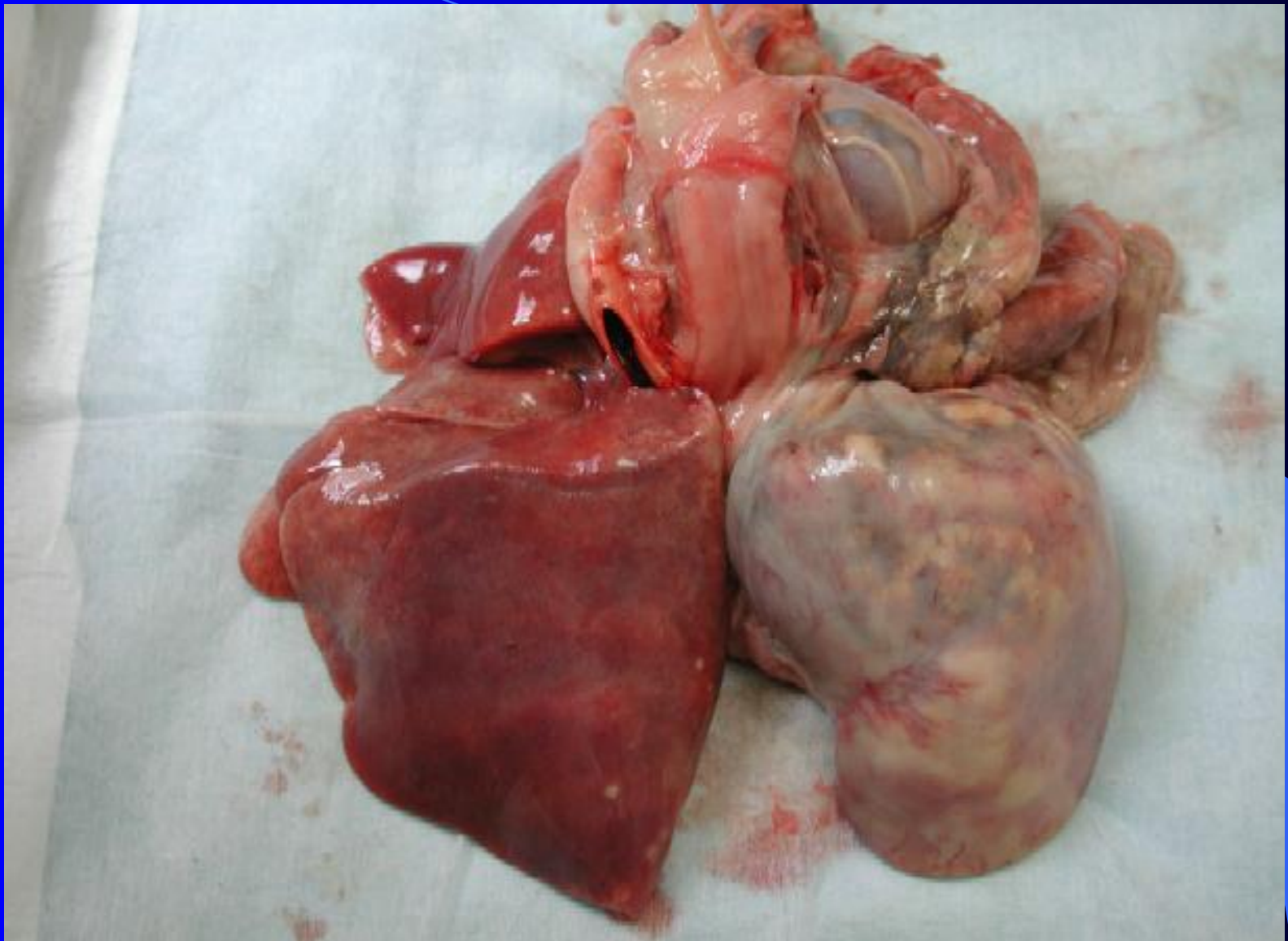


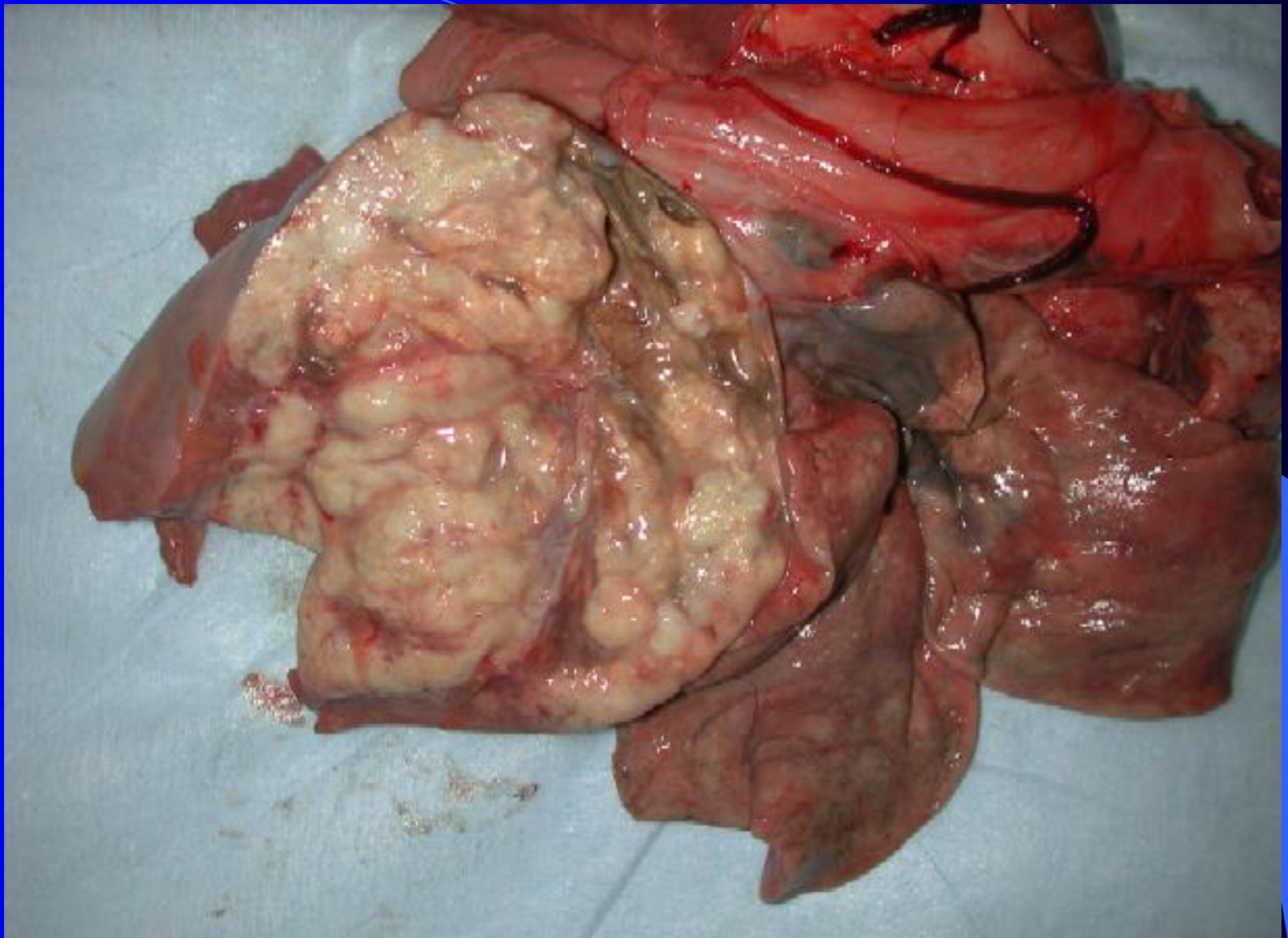




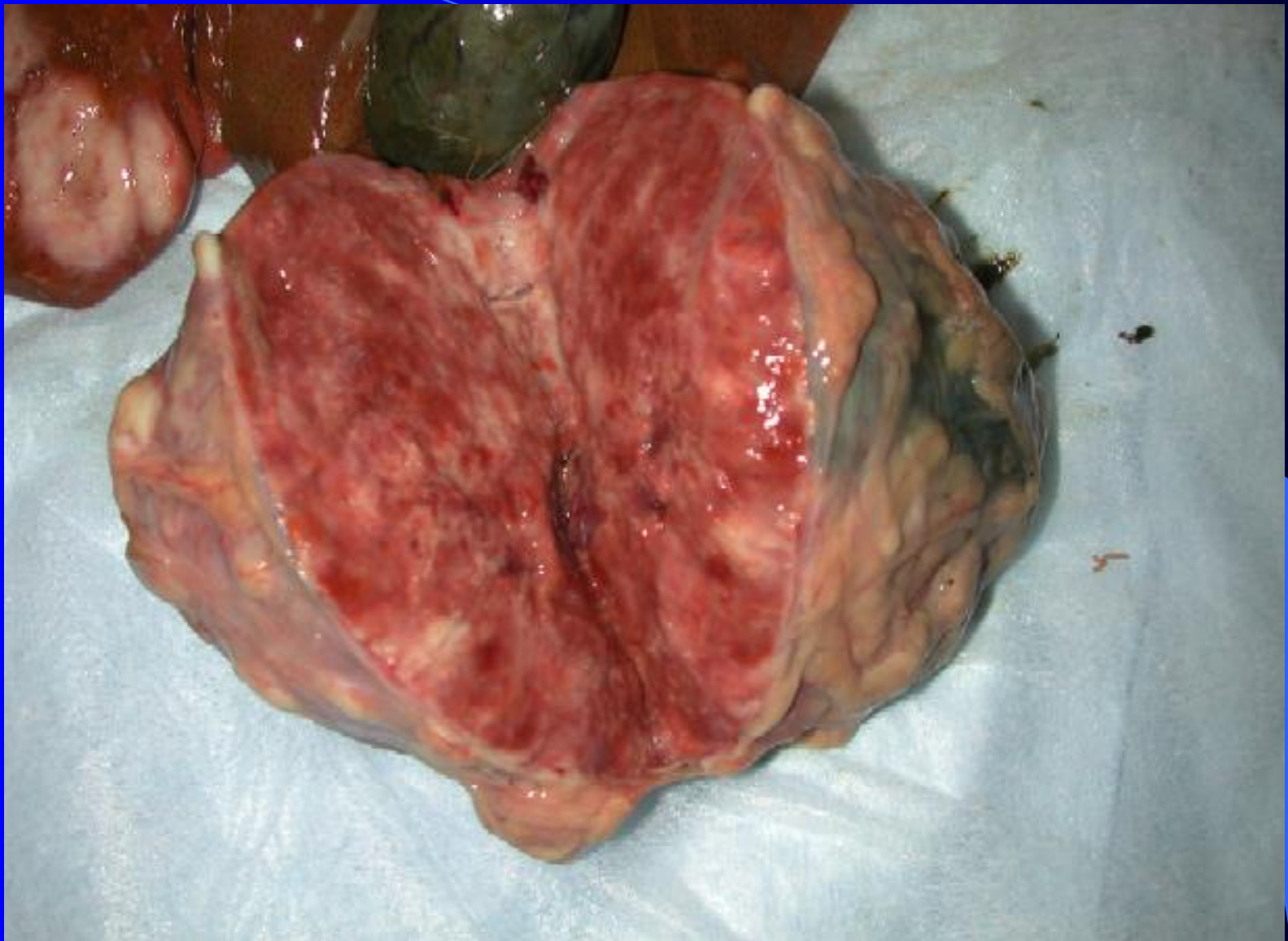
経過 症例2

- 第1病日より輸液療法およびプレドニゾロン投与を開始。飼主の希望により、抗癌剤は使用しないこととした。
- 第6病日に後躯麻痺がみられ、第7病日には食欲廃絶、元気消失。第11病日に斃死。飼主の同意を得て剖検および病理組織学的検査をおこなった









考察

- 初診時に症例1では後肢跛行、症例2では咳嗽が認められ、またいずれも低アルブミン血症を示していたことから、肝臓を含めた複数の臓器が既に腫瘍に侵されているものと思われた。
- 症例1における化学療法も著効はなく、対症療法の甲斐なく急性経過をたどり死に至った。
- 症例2の剖検所見から、肺および肝臓において広範な結節が認められた

考察

- 悪性組織球症はしばしば多臓器を侵し、また上診時には症状が進行していることが多いため、外科的な治療は困難と思われる。化学療法や放射線療法などに対する著効例も報告されていない。そのため、治療は対症療法が主体となる
- 関節原発と思われる悪性組織球症が報告されており症例1では証明できなかったが関節原発が示唆される。